楊萬里詩の口語表現

塩見邦彦

はじめに

楊萬里（一一二七～一二〇六）は、宋代でも南宋と呼ばれる時代を生きた人物である。同時代を生きた人物として二歳年上に陸游、一歳年上に范成大がいる。

楊萬里の詩は四千二百七十首[注一]と、宋代の現存する詩数中、陸游につぐ多さである。

彼の詩の特色は、従来からもよく言われているが、詩中における多くの口語使用である。同時代の陸游も詩中に口語を使用するが、陸游が基本的には唐代の口語を多く使用するのに対し、楊萬里は宋代の口語をより多く使用すると言えよう。その事は既に胡雲翼氏が『宋詩研究』の中で「第十六章、白話詩人楊萬里」というテーマで彼のことを論じている一事からでも判明するであろう。

楊萬里が白居易集を読み、その影響を強く受けたことは、彼自身、詩中で「偶然一讀香山集、不但無愁病亦無」（巻四二『退休集』「端午病中止酒」）と表白している所であるが、その詩人楊萬里の評価は、彼の友人でもあった陸游が「我不如誠齋、此評天下同」（『劍南詩稿』巻五十三「謝王子林判院惠詩編」）と述べているように、陸游自身の貶辞だと差し引いて考えても、南宋という時代を生きた人々から、楊萬里がかなり高い評価を受けていたことの傍証ともなり得よう。

しかしながら、楊萬里の詩が「白話」に富んだものであり、陸游でさえ一目を置かざるを得なかったことの内容に

ついては、従来、詳しく論じられてこなかったと言ってよい。

この小論では、彼の詩の中に使用された口語語彙に注目し、楊萬里の詩の内容が、主に陸游と対比しつつ、いかに口語表現に富んだものであるのかを見てみようと思う。その際、

A、唐代から使用されてきた口語語彙、

B、宋代に入って現われた口語語彙、

の二方面から分析を進めたい。同じ口語とは言っても、前代（唐代）からの口語表現を多く用いる面と、彼が生きた宋代の口語を使用する面の両方を見ることで、彼の詩中での口語表現のあり様を十全にみてみたいと思うからに他ならない。

尚、定本としたのは、『全宋詩』（全七十二冊、北京大学出版社刊）の内、第四十二冊目が楊萬里全四十三巻本である所から、この本を使用した。

A、唐代の口語表現

(1)、阿誰（だれ、どなた）

「阿」が接頭詞として働き、唐代では「阿孩、阿郎、阿那、阿你、阿孃、阿奴、阿娘、阿師、阿翁」等、多くの名詞につく。楊詩では「阿誰」の用例は二六例と、一人の詩中での使用は全宋詩人中最も多く、陸游詩では一例であるのと極めて対照的である。尚、陸游詩と共通する「阿～」は「阿弟、阿堅、阿母、阿堵」位いで、楊詩が友人や過去の人物の名前の上に「阿」を付して詠うことの多さと比較しても、陸游詩での使用例は極めて限られた場合と言えよう。

到底須良匠、非渠更阿誰。（見王宣子侍郎二首、其二）

阿誰會得天公意、只道今年乞雨難（和李子壽通判曽慶祖判院投贈喜雨口號八首、其三）

登臨無地可散策、剥啄阿誰來叩門（和王司法雨中惠詩二首、其二）

不知阿誰喜柔懦、毛穎只今泥樣軟（試毗陵周壽墨池樣筆）
它年荊溪説神醫、非吾孟君更阿誰（送醫家孟宗良漢卿）

(2)、阿那、阿那邊（どこ、どちら）

既に李白の詩で「君家阿那邊」と使われ、唐代以来使用される語彙と言えるが、楊詩でも使用される。

起來拾得聖考詩、燈花阿那聖得知（謝邵徳稱示淳熙聖考詩）
垂楊一徑深深去、阿那人家住得奇（過南蕩三首、其二）
雷電勃興急捉取、阿那精靈會飛去（跋羅春伯所藏高氏樂毅論）
今君結屋阿那邊、疋似剡川若箇言（寄題李與賢似剡庵）
敬亭宛水故依然、疊嶂雙溪阿那邊（曉過花橋入宣州界四首、其二）

(3)、白雨（暴風雨、にわか雨）

既に杜甫がこの語彙を使用して以来、詩人たちに常用される語彙と言える。杜甫は四川の方言をとり入れたと考えられるが、[注二] 杜甫を敬慕した楊萬里にとっても「白雨」は一入興感を催す語彙の一つであったと考えられよう。

燭花半作柴芝開、詩興頻遭白雨催（春夢紛紜）
莫嫌白雨來差晚、但遣黃雲作大穰（和李子壽通判曾慶祖判院投贈喜雨口號八首、其一）
黑絲半把垂天外、白雨初生遠嶺邊（苦熱登多稼亭二首、其一）
一聲白雨催花鼓、十二竿頭總下來（正月五日以送伴借官侍宴集英殿十口號、其七）

(4)、畢竟、至竟（結局、ついには、要するに）

唐代では「必竟、至竟、終竟」と表記されて使用されるが、楊詩では「畢竟、至竟」のみで現われ、「畢竟」が十二例、「至竟」が六例と、一詩人の作中での使用例としては多い方である。いま夫々三例を挙げよう。

秋風畢竟無多巧、只把燕支滴蓼花（出域途中小憩）
比他紅紫開差晚、時節來時畢竟開（黃菊）

畢竟冰輪誰爲轉、碾穿玉宇不生痕（中秋病中不飲二首後一首用轆轤體、其二）
至竟通宵千萬語、真實只是兩三聲（不寐四首、其三）
萬花不分不春妍、至竟專春是牡丹（紫牡丹二首、其一）
秋日非無熱、秋宵至竟清（月臺夜坐二首、其一）

(5)、纔～便（～するや否や……だ）

唐詩では中唐頃から現われ始めたと考えられるが、宋代に入ると頻出する語彙の一つとなる。特に『朱子語類』では「才～便・纔～便」のおびたゞしい使用例がある。楊詩では「纔～便」の表記で十例、「纔～便～便」が一例、「纔～忽便」が一例と、計十二例を数えるが、「才～便」は現われない。

守臣兩月禱山川、詔旨纔頒便沛然（六月喜雨三首、其一）
重陽纔過便新寒、去歳如今暑尚殘（晩登淨遠亭二首、其一）
池冰綻處纔如線、便有鴛鴦浮過來（郡圃殘雪三首、其三）
纔看桃李綿成圍、忽便園林緑作堆（三月十日）
纔雨便晴寒便暖、四時佳處是春天（晩晴二首、其二）

(6)、慚愧・慙媿（かたじけない・ありがたや）

唐詩では中唐頃から現われ始める語彙で、宋代でも引き続き多くの詩人たちに使用される。陸詩での使用例が六例であるのに対し、楊詩では「慚愧・慙媿」併せて八例と、詩数の割に多いと言えよう。

臨溪照影老自羞、慚愧春光尚相識（過秀溪長句）
殷勤買酒謝西山、慚愧山光開我顔（過西山）
慚媿櫂郎能袖手、若非袖手更無功（餘干泝流至安仁）
齋厨索寞如懸罄、慚媿酸寒遣一尊（和王司法雨中惠詩二首、其二）
相人何似相山難、慚媿渠儂眼不寒（送楊山人善談相及地理）

(7)、底事・底處・底物（何事・いづれの所・なにもの、なに）

「底」が「何・甚」の意として詩中に使用されるのは、唐代では盛唐頃からである。楊詩では「底」の単独使用は七十例以上と、一人の使用例では陸詩を凌ぐ。唐代から「事」と結合して「底事」となる場合が多いが、楊詩では更に「處・物」とも結合して多くの使用例が検索できる。以下、夫々の例を二例ずつ挙げる。

出山成底事、藉手得斯人（別蕭挺之泉州二首、其二）
不到湖州妨底事、不如元不到橋頭（湖州三里橋取道徳清）
初喧乍冷飛猶倦、一蝶新從底處來（浄遠亭午望二首、其二）
翟公不有驅山手、城裏松林底處來（寒食相將諸子遊翟園得十詩、其九）
蜜蜂底物是生涯、花作餱糧蠟作家（蠟梅四首、其一）
不知千里寄底物、白泥紅印三十瓶（謝親戚寄黄雀）

(8)、得得（テクテク〈とくる〉）

唐詩では中唐以降に使用され、宋代に入ると多用される語彙の一つとなる。陸詩では一例も検索できないのに対し、楊詩では十八例と多い。

吾家子雲來得得、爲携碧酒買白魚（赴調宿沙渡族叔文遠携酒追送走筆取別）
晩香特地清人骨、多謝西風得得來（元舉叔蓮花）
得得且看錢塘潮、莫莫言攀渭城柳（都下和同舍客李元老承信贈詩之韻）
先生來得得、一笑意舒舒（和羅巨濟山居十詠、其八）
多謝人來得得、踏開三徑雨中荒（和張器先十絶、其七）

(9)、故故（とりわけ・ことさらに）

唐代でも中唐以降に多用される口語語彙と言えるが、楊詩での使用例は陸詩とほぼ同じ八例である。前出の「得得」と同様、宋代に入るとほとんどの詩人が多用する口語の一つと言えよう。

不應如許峭、故惱吾衰（晩寒）
雨又垂垂落、風仍故斜（除夕宿臨川戰平）
也知雨意將無悪、爲勒芳非故寒（雨裏問訊張定叟通判西園杏花二首、其二）
月到中秋故無、今宵月好莫渠孤（中秋無月既望甚佳二首、其二）
沙鷗脚不襪、故踏冰翻（霜塞轆轤體二首、其一）

(10)、箇中（この、ここの〈に〉）

陸詩では十四例と多使用なのに対し、楊詩では三例と少ないが、この唐代から使用され始めた語彙を自己の詩に使用していることは注目してよい。

箇中有句在、下語更誰曾（題湘中館二首、其一）
尊前醉倒定不嗔、同來多半箇中人（赴調宿白沙渡族叔文遠携酒追送走筆取別）
若問箇中何所有、一腔熱血和詩裁（自跋江西道院集戲答客問）

(11)、何似・何似生（いかん・いずれぞ）

楊詩では「何似」二十二例、「何似生」三例と、陸詩と比較しても十三例多い。この語彙、唐詩では盛唐頃から使われ始めるが、宋代ではほとんどの詩人が頻用する語彙の一つとなる。

眼邊俗物只添睡、別後故人何似耀（和蕭判官東夫韻寄之）
分茶何似煎茶好、煎茶不似分茶巧（澹庵坐上觀顯上人分茶）
試思衝熱出、何似帶泥遊（和文遠以作醮相疎）
青春已在殘紅裏、更着渠儂何似生（和子上弟春雹）
只今夏熱已如此、若倒秋高何似生（夏夜誠齋望月）

(12)、禁當（たえる・がまんする）

唐代では杜甫が使用して以来、多くの詩人に使用されるが、杜甫にあこがれた楊萬里も例外ではない。その詩中

での使用例は八例にのぼり、個人の使用例の数としては群を抜いている。

雨冷風酸數日强、老懷不可更禁當（上巳三首、其二）

舊説長江無六月、暮春已自不禁當（過金臺天氣頓熱三首、其一）

夜渡驚灘有底忙、曉攀絶磴更禁當（曉過皀口嶺）

只今新暑已歊然、作麽禁當六月天（端午後頓熱）

老夫敢與山爭强、受侮不可更禁當（夜宿東渚放歌三首、其一）

(13)、匹似、疋似（まるで～〈のようだ〉・～よりはむしろ……）

唐代では「譬如・匹如・匹似」と表記されて詩中に出るが、楊詩では「匹似・疋似」と表記される。この口語は宋代に入ると「匹似（匹如）閑」と「閑」を伴って使用される場合が多い。その場合多くは「ありふれた、普通の、大したことはない」の意で使用される。

細哦秀句清無底、匹似疎梅寒更馨（引見前一夕寓宿徐元達小樓……和君俞韻）

人生匹似風中花、榮瘁昇沈豈非偶（都下和同舍客李元老承信贈詩之韻）

管領社公須竹葉、在家在外匹似閑（社日南康道中）

過湖未得匹如閑、何幸湖心泊畫船（月夜阻風泊舟太湖石塘南頭四首、其三）

(14)、恰似（まるで～のようだ）

唐詩では初唐以来使用される語彙。陸詩では十二例、楊詩でも八例と、比較的宋人に多用される語彙の一つと言えよう。（例句省略）

(15)、聖得知（ただちに〈すぐ〉判る）

唐大では中唐詩人韓愈がこの語彙を使用しているが、他の詩人は全く使用しない。所が宋代に入ると多くの人々によって詩中に使用され、陸詩で一例、楊詩で四例検索できる。宋人でこの外に目についた人物では、方岳、黄庭堅、文天祥、呂勝己、項安世、白玉蟾、李曾伯等、詩でも詞でも使用される。

夜浮一葉逃盟去、已被沙鷗聖得知。（夜離零陵以避同僚追送之勞留二絶簡諸友）
游山不合作前期、便被山靈聖得知。（寒食雨中同舍約游天竺得十六絶句呈陸務觀、其一）
起來拾得聖孝詩、燈花阿那聖得知。（謝邵徳稱示淳熙聖孝詩）
網羅最密是蛛絲、却被秋蚊聖得知。（宿孔鎮觀雨中蛛絲五首、其五）

(16)、A爲復B（AかはたBか、AかBか）

「爲～爲～、爲是～爲是～、爲復～爲復～」と表記される場合もあり、一般に呼応して使用される。しかし、詩では「A爲復B、A爲是B」のように使用される場合が多い。唐代では『變文集』や李百藥撰『北齊書』に「爲～爲～、爲是～爲是～、爲當～爲當～」等が見られる。楊詩では七例と多い。いずれの場合も「不知（＝未審〈そもそも〉で「知らず」ではない）と軽い疑問詞を句頭におき、その後に「A為復B」となっていることに注目したい。

不知蟬報夏、爲復自吟風（山居）
不知山與樓爭長、爲復樓隋山却移（寄題王國華環秀樓二首、其二）
不知塔意厚、爲復船行遲（宿湖甫山）
不知病至此、爲復老使然（感秋五首、其一）
不知雲月入胸中、爲復胸中有雲月（題曾無媿月窗）

(17)、無籍在（たのむところなし）

唐代で使用したのは杜甫と白居易の二例のみであるが、宋代に入ると范成大、李萊老、陳造、王單、項安世、許及之、韓淲等の詩や詞で使用されている。楊詩でも二例にすぎないが、杜詩や白詩での使用例が彼の記憶にあって取入れたものと考えられる。

何似閑人無籍在、不妨冷眼看昇沉（感興）
風似病癲無籍在、花如中酒不惺鬆（風花）

(18)、懸知（きっと～だろう〈と思う〉）

六朝詩での使用例が最も早い例と言えるが、唐代・宋代を問わず詩中で使用される。陸詩程多くはないが、楊詩でも五例を数える。

懸知今定雨、正坐夜來暄（明發石山）
又遣庭闈訊、懸知骨肉情（夜坐）
懸知入奏日、不待貢新茶（送傅安道郎中將漕七閩二首、其一）
懸知住不久、且復相從嬉（得壽仁壽俊二子中塗家書三首、其二）
懸知曉粧好、破霧急來看（二月十四日曉起看海棠八首、其一）

(19)、魚兒（さかな）

接尾詞（～子、～兒、～頭等）が色々な名詞に付き始めるのは、主として中唐以降と言えるが、「～兒」は盛唐の杜詩に現われ、それ以降は多くの詩人の作中で使われる。宋代に入ってもこの傾向は変らず、楊詩の場合も例外ではない。

欲歸小爲魚兒住、更看跳波玉一環（南溪暮立）
魚兒解作晴天雨、波面吹成落點痕（曉坐荷橋四首、其四）
冰上水禽行似箭、忽逢缺處得魚兒（雪中送客過清水閘二首、其二）
一鷗得得隔湖來、瞥見魚兒眼頓開（過新開湖五首、其四）
魚兒殊畏人、欲度不敢渡（觀魚）

(20)、遮莫（たとえ～でも、～であったとしても）

唐代も盛唐頃から使われる語彙で、既に李・杜詩での使用が確認できる。楊詩では十二例と多い。

衲子向來元士子、詩僧遮莫更禪僧（送鄉僧德璘二首、其一）
煮茶剥芡對爐薰、遮莫白駒隙中過（謝丁端叔直閣惠永嘉髹研句容香鬲）
遮莫翳間點霜雪、何曾筆下減瓊瑰（六月十八日立秋送客夜歸雨作）

遮莫坡陀將不去、將詩描取小玲瓏（出真陽峽十首、其七）
市中貨鴆作參苓、遮莫秦和苦口爭（跋忠敏任公遺帖）

(21)、真成・真箇（本当に・まことに）

六朝末期から詩中に現われ、唐詩でも頻出する語彙の一つと言える。宋代においても詩人たちに多用され、「真成」は陸詩では三十例以上、楊詩で十六例、「真箇」も陸詩で九例、楊詩で十三例と、多くの使用例を検索できる。（例句省略）

(22)、只麼（このように、かくの如く）

唐代では「只麼・只麽・只没」と表記される場合が多く、「只麼」は一鉢和尚の「一鉢歌」に一例のみである。しかし宋代に入ると多くの詩中で使用され、楊詩でも八例と多い。恐らく、禅語からの影響が大きいと考えられる。

只麼功名是、如今悟解不（臘夜普明寺睡覺二首、其一）
不應師友地、只麼遣空回（見張欽夫二首、其二）
奉酬只麼隨緣句、嬾更雕肝與探鈎（和李天麟秋懷五絶句、其一）
略無好語償嘉惠、只麼從權只麼權（和曾克俊惠詩）
只麼秋殊淺、如何氣許清（秋日晩望）

B、宋代の口語表現

(23)、遨頭（外出した太守のこと）

宋代では外出した太守のことを「遨頭」と称したらしく、早く蘇軾の詩「次韻劉景文周次元寒食同游西湖」で、蘇軾自身が注を付して「成都太守自正月二日出游、謂之遨頭、至四月十九日浣花乃止」と言っているし、陸游も『老學庵筆記』巻八で「四月十九日、成都謂之浣花遨頭、宴於杜子美草堂滄浪亭」と言う。これらのことから判断して、宋代では成都の風習を指す言葉から太守の外出を指す言葉を意味するようになったと考えられる。陸詩にも三例あ

る。

幕下風流法曹掾、坐窗猶未作遨頭。（張仲良久約出郊以詩督之二首、其一）

老我無緣更行脚、羨君來歲領遨頭。（送丘宗郷帥蜀三首、其三）

遨頭未了詞頭下、四世重新六五公（寄謝蜀帥袁起巖尚書閣學寄贈薬物二首、其一）

(24)、承當（承認する、引きうける）

唐代の語彙ではあるが、未だ詩中には現われない。むしろ禅録に使用される。宋代に入ると方岳、王安石等の詩に現われ、『朱子語類』では頻出する。楊詩では一例検索できる。

舉似老夫新句子、看渠桃杏敢承當。（垂絲海棠盛開）

(25)、此段（ここ、これ）

唐詩には現われず、宋代に入って詩に現われる語彙で、陸詩では十一例、楊詩では二例検索できる。この「～段」は宋代特有の表現と言えるかも知れない。楊詩では六朝以来の「此中・此間」等も現われる場合があるが、数は少ないながら、彼も詩中に使用している語彙と言える。

更約梅花作渠伴、中秋不是欠此段。（釣雪舟中霜夜望月）

此段前無古、夫人獨與俱（近故魏國夫人盧氏挽歌辭三首、其二）

(26)、喫（たべる、のむ）

この「喫」は唐代から使用され、厳密に言えば宋代の語彙とは言えないが、宋代に入ると詩中に頻出する語彙となるため、この項に入れた。楊詩では三十例が数えられ、陸詩の一例と比べて極めて対照的である。

農言秧好殊勝麥、其如緑針未堪喫。（晩春行田南原）

只哦少陵七字詩、但得長年飽喫飯（上元夜里俗粉米爲繭絲書吉語置其中以占一歳之福禍謂之繭卜因戯作長句）

脱蕊收將敖粥喫、落英仍好當香燒（落梅有歎）

老夫非不饞、忍饞不忍喫。（得壽仁壽俊二子中塗家書三首、其一）

何曾夢到龍遊窠、何曾夢喫龍芽茶（謝木韞之舍人分送講筵賜茶）

(27)、打春（立春の日に牛を鞭打つこと）

『東京夢華録』巻六「立春」の条によれば、「府僚打春、如方州儀」とあり、立春の日に牛に鞭を当てて作物の豊作を祈る儀式の如くである。楊詩での例句は一例ながら、上記の如き儀式の田舎での模様を詠っている。

小兒著鞭鞭土牛、學翁打春先打頭（觀小兒戲打春牛）

(28)、道是（～だけれども、～〈ではある〉けれども）

現代中国語の「雖然」に相当する語彙、唐代ではまだ現われず、宋代に入って詩中に使われる語彙と言える。恐らく「説道是」の「説」が省略されたものと考えられ、そこに転接の意味が付加されたものであろう。楊詩では四十例近く検索できるが、いずれも「～だけれども、～〈ではある〉けれども」の意である。

道是朝廷舉廉吏、如何江海尚遺才（送徐吉水解組造朝）

道是秋來還日短、秋來閑裏日偏長（靜坐池亭二首、其二）

偶逢老僧聽僧話、道是壁間留古畫（太平寺水）

忽傳別駕贈佳句、道是頻年當屢豐（和趙鼎輔府判投贈賀雪之句）

庭前雪夜明、道是簾外月（使客不至夜歸獨酌）

(29)、等、等待（まつ）

唐代ではその使用例は極めて少ないが、宋代に入るとかなり使用される。特に「等」は「待」と結合して「等待」と延び、同じ意で使用される。楊詩では「等」は八例、「等待」と併せると十四例を数える。

白錦地衣紅錦障、侵晨供張等儂來（郡圃曉步因登披僊閣四首、其二）

滿閘浮河是斷冰、等人放閘要前行（清曉洪澤放閘四絶句、其二）

誰信雪花能樣巧、等它人睡不教知（姑蘇館夜雪）

却緣臘雪勒孤芳、等待晴光曬麝囊（正月三日驟暖多稼亭前梅花盛開四首、其四）

等待曉光琱好句、曉光未白句先成（不寐四首、其一）

(30)、得似（どうか、どうして～のようだろうか）

「得」に「いかが」の意があることは、既に杜甫の詩にあり、[注三] 唐代から存在するが、この「得」に「似」が結合したと考えられる。宋代に入ると多くの詩詞に使用されるが、楊詩でも五例を数える。

登山得似遊湖好、却是湖心看盡山（同君俞季永步至普濟寺晚泛西湖以歸得四絶句、其二）

交情得似山溪渡、不管風波去又來（三江小渡）

論交何必星霜久、白頭得似傾蓋友（都下和同舍客李元老承信贈詩之韻）

未知今年熟、得似去年否（晚登清心閣望雨）

帝域萬事好、得似早還家（詔追供職學省曉發鳴山驛）

(31)、抵死（一生懸命、命がけで）

既に『變文集』に現われるが、唐詩では未見。所が宋代に入ると詩に現われ始め、楊詩も例外ではない。陸詩では十三例と多く検索できるが、楊詩では以下の三例を挙げよう。

留許枝間慰愁眼、兒童抵死打黃梅（梅熟小雨）

何須抵死露頭角、荇葉荷花老此身（食老菱有感）

春被梅花抵死催、今年春向去年回（正月三日驟暖多稼亭前梅花盛開四首、其一）

(32)、地頭（地点、場所）

宋代に入って使用される「地頭」は、「地」に接尾詞「頭」が付いたもので、場所そのものを指すようになったと考えられる。『朱子語類』ではおびただしい使用例が検索できるが、やや抽象的な意味で使用される場合が多く、問題の「あり所」や、その問題の「程度、角度」を指す場合が一般的である。

不知天公愛佳句、曲與詩人爲地頭（正月十二日游東坡白鶴峰故居其北思無邪齋真猶存）

(33)、費工、費工夫（時間をかける。精力を費す）

莫言秋色無多巧、淨洗清光也費工。（中秋與諸子果飲）
名園曲水費工夫、玉甃瓊磨滴水無（寄題喩叔奇國博郎中園亭二十六詠、曲水）

(34)、蓋頭（頭にかぶる頭巾）
頭にかぶる頭巾のことを「蓋頭」と言ったらしい。『宋元語言詞典』(注四)では「婦女蒙面的頭巾、多用于婚礼（紅色）或喪服（白色）」と説明するが、楊詩の場合は「頭巾」の意と解してよい。
蓋頭旋折山葵葉、擘破青青傘半邊（葵葉）

(35)、怪生（①なるほど～だ、～なのも無理はない。②極めて、非常に）
①は現代中国語で言えば「難怪」に相当するもので、②は「非常」に相当する。楊詩では①②併せて三例を検索できるが、この語彙は宋代に入って以降に現われる口語と言える。『變文集』では「怪」に①の意味がある場合があり、それに語助「生」が付いたものと考えられる。陸詩でも「怪生」は二例検索できる。
①怪生無雨都張傘、不是遮頭是使風（舟過安仁五首、其三）
②夢回紙帳怪生寒、童子傳呼雪作團（戊戌正月二日雪作二首、其二）
道是蘭溪水較寛、蘭溪欲到怪生難（下横山溪頭望全華山四首、其三）

(36)、何似生（いかん、いずれぞ）
既にAの「何似」の項で述べたように、唐代では「何似」が盛唐頃から使用され始め、宋代に入ると語助「生」を付して「何似生」として使用されることが多くなる。意味は「何似」と同様である。（例句省略）

(37)、喚作（予想する、推測する、〈～だろう〉と思う）
唐代ではほとんど現われず、崔道融詩にあるのを確認できるのが唯一の例と言えるが(注五)、宋代に入ると多くの人々に使用される語彙となる。楊詩では十三例、陸詩でも七例と比較的多い。
作夜茅簷疎雨作、夢中喚作打篷聲（聽雨）
忽忘九月清霜曉、喚作濛濛二月初（秋雨歎十解、其九）

無端一陣秋聲起、喚作銅瓶蟹眼鳴（秋夜）
忽然燈下數枝影、喚作窗間一樹梅（懐古堂前小梅漸開四首、其四）
及見盤中酥、喚作庭前雪（使客不至夜歸獨酌）

(38)、借令（もし～だとしても、たとえ～でも）

唐代では同じ意味の語彙として「遮莫、遮渠、縱令、縱饒、縱使、縱然、假如、假使、設使、直饒、任是、正使」といった語彙が使われ、まだ「借令」は現われない。所が、宋代に入ると「正令、直令、借令」といった、「～令」の形で仮定を表現する語彙が現われる。「正令、直令」は陸詩に現われるが、楊詩ではむしろ「借令」が多用される。唐代に「借如、借使」の用例がある所から、恐らくこれらの「借」と、「縱令、正令、直令」の「令」が結合して「借令」を生んだものと考えられる。

文字借令真可煮、吾曹從古不應貧（次乞米韻）
借令今夕寒、我醉亦不知（暮宿半塗）
借令彼不怒、退省我獨安（聞一二故人相繼而逝感歎書懷）
借令字堪煮、識字亦幾希（明發白沙灘聞布穀有感）
借令白再玄、能令年再少（自潮白鬚三首、其二）

(39)、可憐生（かわいそう、愛すべき）

「可憐」に語助「生」が付されたもので、前条の「何似生」と同様である。楊詩では「可憐生」は七例を数える。（例句省略）

(40)、蠢苴（よくない、いいかげん、とらわれない）

『宋語言詞典』によると「亦作"蠢苴・蠢蘧"」と指摘し、例として『五燈會元』『朱子語類』『大慧語録』等を挙げる。『詞典』では詩の用件は挙がらないが、楊詩では二例検索できる。

傳語翟園千樹梅、不應蠢苴索詩催（遣人探梅翟園云尚未開）

蕚苴餘春還子細、燕脂濃抹野薔薇（野薔薇）

(41)、漏逗（もれる、明らかになる）

この語彙は詩よりも文章で使用され、『朱子語類』にも二例存在するが、楊詩では一例検索できる。

若要十分無漏逗、莫將戽斗鎮隈隨身（明發西館晨炊藹岡四首、其三）

(42)、面皮（容貌、顔つき）

唐詩では張元一の「又嘲」詩に一例現われるが、[注六] これは恐らく晩唐期から使われ始めた語彙の一つと考えられ、宋代に入って多く使用されるようになったと考えられる。「面皮兒」と表現される場合もある。

花枝劣相絓人衣、蜂子顛狂觸面皮（遊翟園三首、其一）

誑得妻兒著、還能誑面皮（自嘲白鬚三首、其三）

(43)、～麽（～〈だろう〉か、～〈でしょう〉か）

唐代以前では文末の疑問を表わす場合、「～不、～否、～未、～無」となっているが、宋代に入ると上記の表記に変って「～麽」となる場合が多い。楊詩でも例外ではなく二十例以上と頻出する。（例句省略）

(44)、衲子（僧侶、お坊さん）

「衲」字が僧衣を意味するのを受け、宋代に入って接尾詞「子」を付して僧侶そのものを指すようになったと考えられる。陸詩でも一例検索できるが、楊詩では四例である。

衲子向來元士子、詩僧遮莫更禪僧（送鄉僧德璘二首。其一）

騃女癡兒總愛梅、道人衲子亦爭裁（走筆和張功父玉照堂十絶句、其三）

一瓣佛香炷遺像、幾多衲子拜茶仙（題陸子泉上祠堂）

衲子若全信佛語、生天定在靈運前（戲用禪觀答曾無逸問山谷語）

(45)、能底、能様（かくの如く、この様な）

唐代では既に「能」字に「この様な」という意味を持って使われた詩があり、[注七] この「能」に「底、様」が付せら

れて使用されるようになったと考えられる。陸詩では未見であるが、楊詩では以下の四例検索できる。

煙鐘能底急、催我入城闉（辛丑正月二十五日遊蒲澗晩歸）

最愛河堤能底巧、截他山脚不勝齊（望姑蘇）

青帘不飲能様醉、弄殺霜風舞殺它（夜泊平望二首、其二）

輪與山頭能様嬾、日高猶宿夜來峰（明發瀧頭）

(46)、儂家（私〈一人称を指す〉）

唐代では中晩唐頃から詩中で使用されるが、それ程頻用される語彙という訳ではない。ところが、宋代に於ては多くの詩人たちの詩中で使用され、楊詩も例外ではない。（例句省略）

(47)、拍浮（酒におぼれる、よっぱらう）

「拍泛」とも表記される場合があるが、この語彙、管見の限り晩唐の詩人盧注（生没年不明）の「酒胡子」詩に初出する。(注八) しかし、この詩は『世説新語』の「一手持蟹螯、一手持酒榼、拍浮酒池中、便足了一生」（任誕第二十三）をふまえた表現で「およぐ、浮ぶ」意であり、まだ「酒におぼれる、酔っぱらう」意は付与されていないと言ってよい。所が宋代に入ると、特に楊詩では「酔っぱらう」意で使用するものが多い。

軟紅塵裏幾時休、重碧杯中且拍浮（寄題蕭國賢佚我堂）

老夫下願萬戸侯、但願與君酒船萬舸同拍浮（再和雲龍歌留陸務觀西湖小集且督戰云）

將秋寄來銷我愁、爲君酒船卷拍浮（送羅宣卿主簿之官巴陵）

急須剩踏蓮花麴、藥玉新船待拍浮（六月二十四日病起喜雨聞鶯與大兒議秋涼一出游山三首、其一）

(48)、恰則（やっと～する、ちょうど～だ）

「恰恰、恰好」といった語彙は唐詩にも使用され、宋代に入っても頻出するが、「恰則」は宋代以降の語彙であり、楊詩では八例と個人の使用例としても多い方と言えよう。

恰則天方暮、如何月正中（月下果飲七首、其一）

昨來一雨斷人行、恰則晴時雲又生（晩雲釀雨二首、其一）
恰則今年重九日、也無黄菊兩三枝（重九日雨仍菊花未開用轆轤體）
兒啼驚覺夢中身、恰則華胥政問津（夜寒獨覺）
恰則新鶯百囀聲、忽有寒蛩終夜鳴（送彭元忠縣丞北歸）

又、「恰則～恰則～」として使用する場合もある。

却嫌地暖無冰凍、恰則飛來恰則銷（慶長叔招飲一杯未囀雪聲璀然即席筆賦十詩、其三）

(49)、渠儂（かれ、かれら〈三人称を指す〉）

「渠」が三人称の「かれ（それ、あれ）」の意で使用される例は、既に「爲焦仲卿妻作」に用例があり、唐宋代以降も詩中に多用される。しかし、宋代では「渠儂」も詩中で多用される語彙であり、楊詩では三十例近くにのぼる。

青春已在殘紅裏、更着渠儂何似生（和子上弟春雹）
相人何似相人難、慙媿渠儂眼不寒（送楊山人善談相及地理）
夜深不應有飛蝶、渠儂似欲伴人行（月夜散策縣圃有飛蝶仍聞笛聲）
麴生未怕愁城峻、聊遣渠儂爲九攻（和胡運幹投贈）
斫盡老槐與枯柳、更着渠儂作麽生（夜聞風聲）

(50)、太～生（とても～だ、非常に～だ）

この語彙、唐代でも既に使用されて、李白詩、虞世南詩、羅隱詩等での使用が確認できるが、宋代に入ると多くの詩人たちの愛用する語彙となる。既に宋人歐陽脩が指摘する如く、(注九)「作麽生、何似生」のように語助「生」を付して使用されるもので、「太」と「生」の間には、一般に形容詞が入るのが普通である。（例句省略）

(51)、脱體（体から離れる、ぬぎすてる）

禅録で使われる副詞の「さながらに、そのままに」の意ではなく、名詞として「全体、まるごと」の意の「脱體」

から、動詞としての「体から離れる」意まで巾の広い意味をもつ。

錦衣脱體未全瘦、雪粉圍腰猶半愁（省中直舍因敲新竹懐周元吉三首、其三）

(52)、下梢（結局、その結果〈として〉）

唐代では管見の限り現われず、宋代に入って特に文章で使用される語彙。『朱子語類』では「下梢頭」と接尾詞「頭」が付されて現われる。

水到峨眉無去處、下梢不到忘歸路（池口移船入江再泊十里頭潘家灣阻風不正）

(53)、也則（また～）

唐代では「也」単独で使用されるが、宋代では「也則」と二字になって使用される場合がある。楊詩では、勿論「也」が圧倒的に多いが、「也則」の場合もあることは以下の用例が証明する。

自適何須妙、能聽也則賢（寄題郭卿琴堂）

天光淡靑日光白、道是銀漢也則得（明發棲隱寺）

遠山細膩近山粗、別處求粗也則無（登奉聖寺千佛閣四首、其二）

紅殘緑暗已多時、路上山花也則稀（野薔薇）

便令隔霧光難到、也則傾心苦爲誰（寄題程元成給事山居三詠、葵心堂）

(54)、元子（鴨のつけもの）

詩の中で楊萬里自身が注を付して「江西以木葉汁漬鴨、皆深紅、曰元子」と言う如く、江西地方では鴨を漬けたものを「元子」と称したらしい。この「元子」は「杭子」が本来の表記らしく、『齋民要術』巻六「養鵝鴨第六十」に「作杭子法」があり、それによると「杭木皮の煮汁と塩で鴨子を漬ける」とある。また、『老學庵筆記』巻五によると、『齋民要術』の用法を「鹹杭子法」と言い、「杭木皮で鴨の卵を漬ける」とした上で「今呉人用處杖根漬之、亦古遺法」と言う。漬けるものに鴨肉と卵の違いはあるが、鴨の漬けものを「元子（杭子）」と呼んだらしいことは、上記の記述から証明されよう。

深紅元子輕紅鮓、難得江西鄉味來（野店二絶句、其二）

(55)、作麼生（いかが、どうして～か）

唐代では「作摩、作摩生、作麼生」のいずれかの表記で使用される。唐詩中では貫休詩の「作麼生」一例のみで、詩中での使用は極めて珍しいと言える。所が宋代に入ると多く詩中に取込まれ、この現象は宋代の特徴の一つと言ってもよい。楊詩でも十三例と多く、この語彙の使用例から楊萬里らしさを見てとることも可能である。

近路還如許、長途作麼生（早發建安寺過大櫟虚）

心知那有楊州鶴、更問儂當作麼生（贈曾相士二首、其一）

只言此老渾無事、種竹移花作麼生（題王李安主簿佚老堂二首、其二）

曉起窮忙作麼生、雨中安否問秋英（秋雨歎十解、其八）

今年寒食與清明、各自陰晴作麼生（清明雨寒八首、其三）

おわりに

以上、唐代以来使用される口語語彙と、宋代以降に使用されるようになった（と考えられる）口語語彙に焦点を当て、楊萬里という詩人の詩に限って具体的に見てきた。勿論、彼が詩中に採用した口語は、以上に止まらないこと言うまでもない。

この小論で取り挙げなかったが、彼が作中に取入れた宋代口語に限って言えば「辟差、薄相、打閑、底里、黒甜、苦、幾大、來休、身己、頑、未渠、已分、永算、照管」と言ったもの、或いは接尾詞「兒、頭、子」がつく「蜂兒、半頭、初頭、前頭、上頭、宿頭、月頭、句子、欄子、腦子、片子」等といったものもあり、彼の口語使用の例は、唐代の詩中での使用例と比較しても圧倒的な多さと言えよう。最初にも指摘したように、陸游と比較しても宋代口語を用いている多さは一目瞭然なのであるが、それはまた、宋という時代全体の特色の反映でもある、と言えるかも知れない。

と言うのも、視点を変えて四字熟語という事に焦点を当てると、宋代は四字熟語が詩中に使用されるようになったという点で、唐代とは同等に論じられない。

いま、楊詩で使用された四字の語彙に目を向けてみると、以下のような語彙を挙げることができる。

碧碧黄黄、白日青天（青天白日）、白白紅紅（紅紅白白）、白白朱朱、膃膃膊膊、風風雨雨、國手無雙、怪怪奇奇、虎面豹頭、花看走馬（走馬看花）、來來去去（去去來來）、千千萬萬、前前後後、四方八面、十十五五、收風拾雨、下下中中、休休莫莫、一言半語、整整斜斜

この中で「花看走馬（走馬看花）」は有名な杜牧の詩を典故としている語彙と言えるが、あとは「収拾風雨」を「収風拾雨」の様に少し字順を変えて使用した数例以外、文字の「ＡＢ」を「ＡＡＢＢ」としてものがそのほとんどである。そして、このような四字語彙の使用とも関係すると考えられるが、彼の詩では同一句ないしは二句の中に於て、同一文字をくり返し使う場合が極めて多い。それは、今まで見てきた例句を見れば既に感受されていると思われる。その手法は彼の詩を読み、詩を聴く者に重層的なイメージを喚起するという効果を持っている。恐らく、楊萬里という人物はユーモアに富んだ人物だったのではないかと想像されるが、(注十) 彼が詩中に採用した俚言や土地土地の方言、口語も含めたそれらが混然一体となって独自の詩的世界を創りあげていると言えるのではなかろうか。

彼の重層的な文字の使用例を、以下、いくつか見てみよう。

看得雪光還似月　雪光を看得れば還た月に似たり
元來雪月一般般　元来雪と月とは一般般
（月夜觀三首、其二）

伯和來自西山西　伯和来るに西山の西よりす
西山爽氣在睫目　西山の爽気　睫目に在り

（己亥正月二日送李伯和提幹歸豫章）

窗底梅花瓶底老　窗底の梅花　瓶底に老ひ
瓶邊破硯梅邊好　瓶邊の破硯　梅邊に好し

（春興）

枕上還鄉枕上回　枕上鄉に還るも枕上に回り
更更點點把人催　更更点点人を把へて催す

（夜雨獨覺）

以上の様な造句は枚挙に遑がない。

右に見た同一文字の繰り返しは、一度使用された文字を次の句で再度反復して新たなイメージの展開を見せる。ちょうど一つの言葉が次の言葉へ重なりながらイメージを創りあげる作用をしていると言えよう。しかも、彼が何気なく文字を連ねている（と考えられる）所が、楊萬里の詩に対する感覚の鋭さと言えようか。

このような同一文字の繰り返しは、読む者や聴く者にくどい感じを与える場合があるが、くどさよりはリズミカルに響く所が、彼の詩の持ち味であり、作詩手法のセンスによるものとも考えられよう。

彼の詩が、以上観てきた口語や俚言、方言といった語彙の自由な操作と共に、今一つ重要なものとして指摘したいのは、発想や観察の視点のしなやかさをも備えている点であろう。次の詩を見てみよう。

順流一日快舟行　流れに順ひ一日快き舟行
薄暮風濤特地生　薄暮　風濤　特地（ことさら）に生ず

不是江神驚客子　是れ江神の客子を驚かすにあらず
勸人早泊莫追程　人に勸めて早く泊り追程するなかれと
（夜泊曲灣）

船旅をする旅人は、風にまかせてすべるように江を進んでゆくが、黄昏時になって風波が荒くなり始めた。これは江の神が旅人を驚かすためではなく、先を急ぐことのないようここらで停泊するようにと、それとなく勸めているのだ、と詠うこのような発想は、恐らく他の詩人ならば別の詠い方をするのではないかと考えられる。(注十一) そのように考えると、楊萬里の発想や視点が、彼の詩を構成しているもう一つの重要な要素であることが判る。次の詩も観察の視点という面から把えると、仲々秀抜なものを持っている。

下轎渾將野亭看　轎を下り渾て野亭を將って看る
只驚脚底水聲寒　只だ脚底に水声の寒きに驚ろく
不知竹外長江近　知らず　竹外に長江近きを
忽有高桅出寸竿　忽ち高桅の寸竿を出す有り
（過神助橋亭）

この詩は、長江附近にある茶店が水面すれすれに建っていて、急に、船の高い帆柱がぬっと現われて驚いた、というものである。この場合、茶店を利用したであろう人々が目にした光景を、彼は人々と共に素直に驚き、それをそのまま、何の作意も感じられない程自然に詠っていると言えよう。その意味で、この詩からも楊萬里という人物の着想や視点の柔軟さが感じられよう。

彼の詩が、詩語が織りなす重層的なイメージと共に、上に観たように何物にもとらわれない発想や視点、加えて口

語の多用という条件から受ける親しみ易さ、こういったものが彼の詩を読む者に「白話詩人」という印象を形創っていると言っても過言ではあるまい。このようなスタイルは彼の天性の部分と、江西詩派から陳師道、王安石、唐人では特に杜甫と白居易、更には晩唐の陸亀蒙までをも、自己の詩の手本とする自由さ。恐らくその自由闊達な姿勢の産物として彼の詩が存在していると言う事なのではないだろうか。

この小論では、彼の詩の中に現われる口語表現を手がかりとしながら、彼の作詩態度にも触れた。彼にとっては、目にするもの全てが作詩の対象となり得たし、そこにこそ彼の詩の本領があった、と結論づけてよさそうである。

注一、底本とした『全宋詩』四十二冊目の詩数合計。

注二、「四川綿陽、三台、安県、徳陽第一帯地方、称呼偏凍雨爲白雨。六月炎天下暴雨、他們呼之爲〝打白雨〟」（林昭徳編著『詩詞曲語雑釋』、一九八六、四川人民出版社）

注三、「己東之峽生凌澌、波蒼回斡人得知」（「後苦寒行」）

注四、『宋元語言詞典』（龍潜庵著、一九八五、上海辞書出版社）

注五、崔道融「病起」詩に「强攀庭樹枝、喚作花未開」とある。

注六、「未見桃花面皮、漫作杏子眼孔」

注七、「春秋能浩蕩、送別又如何」（李嘉祐「春日長安送從弟尉呉縣」）
「北風吹雁聲能苦、遠客辭家月再圓（張繼「馮翊西樓」）

注八、「劉伶盧向酒中死、不得酒池中拍浮」

注九、『六一詩話』参照。

注十、以下の文章は、楊萬里の詩を理解する上で示唆に富むと考えられる。
「イロニーの精神とは、まさに緊張を解きほぐす精神であり、それは一時の平静な状態をすかさず捉えては、その遊戯を再開する」（11頁）、「イロニストはその視点を犠牲にしてわれわれを楽しませてくれるのである。事

実、細部は笑うべきものというより、おかしいのである。（中略）イロニーはユーモアをもって後悔に同意し、すべては空であるが、何ものも空ではない、と断定するのである。」（209頁）V・ジャンケレヴィッチ著、久米博訳『イロニーの精神』（紀伊国屋書店、一九七五・十）

注十一、これは、例えば「風波が荒くなって来たのでここに停泊することにした」とか「風波が荒くなってきたので周りの舟も既に停泊している」といったものであろう。

参考文献

1、『唐五代語言詞典』江藍生・曹廣順編著、上海教育出版社、一九九七・十一。
2、『唐詩口語の研究』塩見邦彦編著、中国書店刊、一九九六・一。
3、『宋語言詞典』袁賓・段曉華編著、上海教育出版社、一九九七・十一。
4、『宋元語言詞典』龍潜庵著、上海辞書出版社、一九九五・十二。
5、『朱子語類口語語彙索引』塩見邦彦編著、中文書店、一九九二・五。
6、『詩詞曲語辞匯釈』上・下、張相著、中華書局、一九六三・二。
7、『宋詩研究』胡雲翼著、商務印書館、一九五九・五。
8、『宋詩縦横』趙仁珪著、中華書局、一九九四・六。
9、『詩詞曲詞語雑釈』林昭徳編著、四川人民出版社、一九八六・三。
10、「剣南詩稿口語語彙索引稿」塩見邦彦編著、『島大言語文化』No.5、一九九八・七。